

「濫澤写真」の体系的な研究と課題

——地理学的視座からの経験——

八久保 厚志／平井 誠／鄭 美愛／藤永 豪

はじめに

本稿は、神奈川大学21世紀COEプログラムのまとめにあたり、「『濫澤写真』の体系化」について、主に人文地理学のアプローチで研究にあたった学内外の研究者がどのような問題関心で何を思考してきたか、そしてどのような感慨を持つに至ったかを整理するものである。これによって非文字資料としての写真利用の可能性を示すにあたっての研究上の課題解明への材料を提供することが目的である。最初に本稿の構成を示すことにする。次章以下、研究者ごとの研究視点と対象を示し、その概要を整理する。すなわち、Ⅰでは「濫澤写真」と現代の景観を結びつけるための一資料として郵便切手の可能性について八久保が言及し、Ⅱでは平井誠が日本の離島と海岸集落の景観変化に関して小豆島での経験について、Ⅲでは鄭美愛が国際シンポジウムで言及した韓国の海岸地域の景観について、Ⅳでは藤永豪が日本の農・山村についてその研究上の経験からその課題や問題点についてまとめた。最後に写真、特に「濫澤写真」の非文字資料化のフローと諸課題、空間認識と非文字資料としての写真の有効化と体系化について考察し、私たちの課題への全体的な感想をまとめることにする。

Ⅰ 景観分析のための郵便資料の可能性

八久保は、「景観分析のための非文字資料としての郵便資料とその可能性—日本・韓国における景観切手を中心に—」（八久保 2006）において以下のような考察を行った。

景観分析に対して、絵画、絵地図、写真、映像などの非文字資料からその構造、メカニズム、含意などを分析しようとするプロジェクトが、本学においても21世紀拠点形成事業（COE）の指定を受け推進されている。その中で筆者らのグループは、濫澤敬三らの残した映像資料群（いわゆる『濫澤コレクション』）の中から写真資料（『濫澤写真』）の分析を進めている（八久保 2003）。その過程で各国が発行してきた郵便資料群（郵便切手、印紙、絵入り葉書、風景スタンプなど）が基準資料（『濫澤写真』）を時間的に補完する可能性を感じた（八久保 2003；須山 2004；浜田 2005）。そこで本稿では日本、旧琉球民政府、韓国の郵政が発行してきた郵便資料群、とりわけ郵便切手、風景スタンプを直接的な検討対象とし、その定義、概要、含意などについて検討を加える。その目的は、「濫澤写真」の分析に関する手法開発と、景観分析としての郵便資料の資料としての有用性と可能性を示すことである。

本稿では景観分析のための非文字資料としての郵便切手、とりわけ景観を描いた公園、観光地切手の概要とその有効性について検討した。その結果、以下の点が指摘できる。①郵便切手は発行主体の時代的戦略によってそのモチーフが選択され、デフォルメされる場合がある。このことは景観を描くアイテムも同様であるが、その情報性に信憑性がより期待される地理的情報が主題となっていることでその信憑性は高く、この点で景観分析の基礎資料として有効である。②日本と韓国の事例で示されているように、景観へのまなざしについて、地域的な感性が共有されている場合が感じられる。したがって、人文主義的な地理学における景観分析の手法は一定の限界を越えて有用である。③したがって、「濫澤写真」



写真1 土庄東港



写真2 猪垣



写真3 段々畑



写真4 電照菊の栽培施設

と現在の景観の間隙を埋める上で郵便資料は有効的であるといえる。この点、官製とはいえ郵便資料の景観分析に供する可能性は大きいと考えられる。ただ、言わずもがなであるが、郵便切手として発行されていない景観の場合は当然のことながら利用できない。世界の切手発行国・地域は現在でも200を越えており、近代郵便制度が継続する限りは今後とも旺盛な切手発行活動が行われるであろうから、切手現物の収集・保存だけでなく電子媒体での記録としても完備しておく必要があると考えられる。実際、各国郵政は郵政資料の収集・保存に積極的であり、わが国でも郵政官庁の他、郵政省管轄のていば一く、民間の「切手の博物館」がその役割を果たしつつある。また、各地の郷土資料館でも郵便史料の活用が図られつつある。ただ、現在のところ史料として文字史料中心の収集・保存・展示が中心である。近代郵便の歴史がまだ百数十年で、郵便切手や運送経路図など非文字資料が比較的残っている現在、散逸する前にこの分野の現況調査、保存・展示計画などの

企画が必要な時機が到来しているといえよう。

Ⅱ 小豆島の景観

海岸地域と離島を研究対象として八久保厚志(2004)、八久保・須山(2004)の各報告論文としてまとめている。海岸地域における現在の景観研究の一環として、平井は小豆島で景観調査を行った。そして以下の考察を行った。

2006年3月24日・25日の両日、小豆島を巡り景観調査を実施した。その際に撮影した景観写真から、小豆島の地域性やその変化を考えてみたい。写真1は、土庄町銀波浦から土庄東港を撮影したものである。小豆島は面積150km²の小さな島であるが、その中に標高数百m程度の山がいくつもあり、起伏の大きな地形を有している。そのため、人々の集落は海岸沿いの非常に狭い平坦地に張り付くように形成されている。人々はこの山を切り開き畑作などを



写真5 イチゴの栽培施設

行ってきた。その際イノシシをはじめとする野生動物による被害も大きく、島内にはイノシシや鹿を防ぐための猪垣が設けられた（写真2）。島の中には段々畑が作られた（写真3）。この写真3から、小豆島の現状についていくつか考えることができよう。まず大きな変化は段々畑ののり面である。かつては、写真右側のような石組みであったが、現在ではコンクリート製へと変化している。石組みののり面を維持するためには多くの労力が必要であり、集落全体での作業となる。しかし、写真右下にも写っているように現在の小豆島は高齢化が進んでいる。そのため、石組みののり面を維持することは困難となったが、土砂災害を防止するためにのり面を維持することは必要である。そのため、コンクリートで補強されたものと考えられる。段々畑では、自家消費用の野菜などが生産されており、伝統的な畑作は行われなくなっているが、その一方で、ビニールハウスなどの施設を活用した農業は盛んになっている。写真4は電照菊の栽培施設であり、写真5はイチゴのハウス栽培である。阪神大都市圏との近接性を活かした農業経営が中心となっているのである。

さらに、島の変化を示しているのが写真6である。これは、土庄町役場の近くにあるショッピングセンターである。ホームセンターや家電量販店、食品スーパーなどが立地し、広大な駐車場を有している。このような自動車利用を前提とした郊外型の商業施設の立地は、小豆島全体の商業環境の変化を示すものといえよう。かつて小豆島は南東部の塩田を中心とした醤油の醸造や畑を切り開いて作った段々畑で



写真6 商業施設

の農業、さらに瀬戸内海での漁業が中心であったが、これら数枚の写真を概観するだけでも、伝統的な農業形態の衰退から施設農業への転換や、商業環境の変化などを理解することができる。その意味において、景観の真の重要性を再認識し、今後の地域調査などに役立てることが重要となるであろう。

Ⅲ 奄美大島と韓国海岸地域

このテーマにおいて須山聡はいくつかの論攷を明らかにした（須山聡 2004；2005）。ここでは須山および八久保他と韓国海岸地域で共同調査を行った鄭美愛の考察を以下にまとめることにする。

景観写真は撮影した時点の自然環境や文化的な様相を生々しく記録できるため、さまざまな分野において資料的な価値が非常に高い。外国で写真撮影をするときにはいつも好奇心と期待感をともなう。しかし、その写真撮影の目的が単なる観光客としての好奇心ではなく、学術的な関心に基づくものであるとすれば、撮影という行為には一定の体系性が求められなければならない。地理学者にとってフィールドでの写真撮影は調査の基本である。地理学的分析と考察は、「景観の観察」から始まる。地理学を研究する人々が写真を撮るときのテーマは常に「その地域らしい景観」をフレームに収めることにある。澁澤らは地理学徒ではないが、「地域らしさ」の発見は彼らの関心の範疇にあったと考えられる。70年前に彼らが撮影した「澁澤写真」にも、当時の韓

国らしい自然・人文的景観が刻印されている。

筆者は2004年の韓国滞在中に、八久保先生、浜田先生らとともに「澁澤写真」の場所を探す作業に参加させていただいた。一緒に訪ねた蔚山は、大学在学中の巡検で訪ねた場所とはまったく異なっていた。70年前の蔚山を現在の景観から見つけ出すのは困難であろうというのが私の第一印象だった。

「澁澤写真」が撮影された1930年代の韓国においては、朝鮮時代同様の伝統的な要素に近代化の影響が浸透しはじめた時代である。しかし、「澁澤写真」に写されている写真は近代化の要素を注意深く排除した農村景観のようにも思える。写真に写されている蔚山には近代化の要素はほとんど認められなかった。70年という時間が経過し、伝統的な要素を読みとることはほとんど不可能である。

もう1つの撮影地である、荏子島（イムジャド）には、朝鮮時代に馬を飼育する牧場が設置されていたが、1796年にこれを他の島に移し、農耕地としての利用が始まった。この島では、エゴマがたくさん採れたことから荏子島と名付けられた。島の土壌は砂質土であり、現在はネギやタマネギの生産地として知られている。荏子島は離島であるが、東に位置する智島（チド）までは架橋され、本土から直接陸路で結ばれている。智島から荏子島まではフェリーでわずか15分である。しかし、以前は木浦から船で6時間もかかった。島の中心地の鎮里（チンリ）には荏子面の面役所があり、70年前も現在も島の中心地としての機能を持っている。荏子島のような離島では水田は貴重であり、水田景観は現在でもあまり変わっていない。集落全体の土地利用の基本構造は変わらないものと思われる。しかし、全体から見ればわずかではあるものの、集落を象徴する景観には変化も見られた。

写真に出された70年前の景観は、蔚山、荏子島ともに農村的であった。しかし、現在の写真と比較すると、一方は原景観をとどめない高層ビル群に変化し、もう一方は構成要素を変えつつも農村景観を維持していることがわかる。蔚山、荏子島の2地点の例から、同一地域において過去と現在の変化を見出すことに加えて、異なる地域どうして過去・現



写真7 荏子島波市全景（神奈川大学 日本常民文化研究所所蔵 目録番号：ア-66-7）

在の景観を比較することによって得られる知見も多いことが理解できる。

第2回神奈川大学COE国際シンポジウムのポスターに載っている一枚の写真が印象的だった。その写真は荏子島に開設された定期市「波市（パシ）」を撮影したものであった（写真7）。この写真を撮影した故宮本馨太郎は、この写真に韓国らしい景観を見出したことであろう。しかし現在、現地には波市の痕跡すらない。

波市とは「海の上の魚市場」を意味する。波市が開かれるとそこには一時的に市街地が形成され、大勢の漁師や商人向けの飲食店・宿泊施設などが並んだ。1930年代、全羅南道荏子島近辺で有名な波市はタリ波市であった。台耳（タリ）島はソムタリとムルタリの2つの島から構成されていた。主にタリ波市が開かれたのはソムタリであった。ソムタリは荏子島から約500m、船で10分の距離である。

タリ波市は毎年6月上旬から10月下旬までおよそ5ヶ月間開かれ、8月に最もにぎわった。毎年6月上旬になると浜辺は数百戸の藁葺きの家や、港に停泊する漁船の光でにぎわった。港は数千人の漁師と商人、観光客であふれたと伝わっている。また、波市が開く際には約500隻の船と80カ所の宿泊施設や飲食店が出店したという。しかし、タリ波市は植民地時代が終わり、動力船の普及や漁獲技術の発達などにより、朝鮮戦争後は近くの島に移ってしまい、1991年からソムタリは無人数島になった。

さて、この写真7から韓国の原風景を探すことは困難であるかもしれない。この写真に写し出された

人々の服装や家の作り方からは、むしろ近代化の影響が見て取れる。

まず、海岸線の近くの砂浜に建物があること自体、不思議に思う。海に面した集落は通常波を避けて海岸砂丘上かその背後に立地する。また写真の家はあまりにも簡易的・開放的で生活感がないため、一般の民家とは思えない。また、韓国の伝統的な家には写真に写っているような日本式の長屋はない。伝統的な藁葺きの家は塀に囲まれ農作業をする庭が付いていた。もちろん、写真は漁村であり農村とは違いがあると思うが、それにしてもさらに、漁業関係の道具が見あたらないことも不思議である。

次に、写真に写る人々の服装からは近代化の影響を感じ取ることができる。何人かの人々は洋服を着ていることがわかる。子供も半ズボンをはき、ランニングシャツを着ていることから、この写真の地域では日本の影響をすでに深く受けていることが推定できる。

一枚の写真資料から若干の知見を述べてみたが、こうした写真資料は、地理学を含む多くの学問にとっては文字資料以上の価値を持つ。「濫澤写真」をより有効に資料化・体系化するためには、時間と手間をかけて撮影場所を検証する作業が必要である。

アルバムの中で眠っている写真を叩き起こして、記録にすぎない写真を資料として目覚めさせる必要がある。

Ⅳ 農山村

このテーマでは藤永豪が一連の論攷をまとめている（藤永 2004a; 2004b; 2004c; 2005a; 2005b; 2006a; 2006b; 2007a; 2007b; 2007c; 2007d; 藤永ほか2004）。そこで本稿では、別の角度から以下のように本プログラムの経験をまとめた。

筆者が神奈川大学21世紀COEプログラム（以下、COE）に在籍させていただいたのは、2003年10月から2006年3月までの2年半である。本COEに採用していただくまで、私は大学院修了後、関東のいくつかの大学に非常勤講師として勤め、主として教

職課程における地理学関連の授業を担当していた。その中で常々感じていたことが、「フィールドワークが足りない」ということであった。これには、自身の研究を進めていくための材料の不足はもちろんであるが、同時に、学生たちに提示する資料や（地域を語る上での）私自身のフィールド経験の少なさに対する不満が含まれていた。もっと臨場感ある授業を展開するためにも、たとえ調査の成果が上がらなくとも、フィールドに出ていきたいと強く願っていた。しかしながら、当時の私の収入は、恥ずかしながら最も少ない時で月に4～5万円。文字通り、食べていくことだけで精一杯であり、とてもフィールドに出ていく余裕はなかった。そんな悶々とした日々が続く中、本COEプログラムにおいてポストドクター研究員を公募することを知り、ダメもとで申請してみたところ、何の手違いか、誤解か、運よく採用していただくことになった。採用通知をいただいた時には、自宅の部屋で飛び上がり、床を踏みならして喜んだことを覚えている。この時、正直に言えば、「これでしばらくは毎日のめしの心配をしなくてもいい！」という安堵感が先に立ったのだが、同時に、「フィールドに出られる」という嬉しさがこみあげてきた。

本COE在籍中は、自身のフィールド以外にも、様々な先生方のフィールドにくっついて回り、各地を歩くことができた。日本国内だけではなく、若手研究者の海外提携機関への派遣事業では、中国北京市の農山村を回ることもできた。また、私は地理学を専門としているが、民俗学や文化人類学、歴史学を専門とされる諸先生方や同僚、大学院生諸氏から様々な御示唆やアドバイスをいただき、興味深いお話をお聞かせいただいた。「では、その後、研究成果を上げたのか」と聞かれれば、うなだれるしかない不実な情けない自分があるのだが……。この点については、COEの諸先生方に平身低頭、お詫び申し上げるしかない。

しかしながら、その後、現在の大学に勤めるようになり、教育という現場に立つ中で、フィールドワークの重要性を改めて感じている。COE在籍中に、少ないながらもフィールドを歩いた経験は、現在、

教壇に立つ私にとって大きな糧となっている。各地で撮影した写真や収集した資料、聞き取り調査の中でお伺いした住民の話や体験をもとに授業を進めるのだが、やはり、自身の経験として“蓄積された地域”を語る場合とそうでない場合とでは、学生の反応に大きな差が出る。私自身、授業の中で、足を運んだことのない地域について解説しなくてはならない場合、自らの語る言葉が上滑りしていることを痛感する。現在、担当している科目の中に「世界地誌」というものがあるが、未だ訪れたことのないヨーロッパやアフリカについて説明する時と、少ないながらも何度か足を運んだアジアについて説明する時とでは、学生はもちろん、私自身の感触がまったく異なる。以前、まだ大学院生だった頃、学会である先生から「お前は引き出しが少ないから、まだ就職を考えちゃいかん」と言われたことがある。研究のことを指しておっしゃられてのことであろうが、このことは教育についても当てはまると、今思い返している。

それと同時に、自分が地域について語ることに對する不安も大きく膨らみつつある。果たして、私は大学生たちに、地域の何を語ろうとしているのか。そして、その何とは一体何なのか。少なくとも、これは極めて数少ない私の見てきた地域の相貌であり、学生のみなさんにはみなさんなりの地域の見方があるんだよ、という、極めて苦しい予防線を張りながら授業を進めている。

ある授業で、農山村の景観の話をした際、「ムラ」ってなんだろう、ということになった。そこで、学生に「何があったら、ムラといえるか」と問いかけた。すると、案の定、家、田んぼ、畑、神社、お寺、川、山といった返事が返ってきた。しかし、その中である学生が決してふざけてではなく「コンビニ」と答えた。食料品や雑貨を売る小さな商店ではなく、コンビニエンスストアである。確かに、現在ではよほど辺鄙なムラでもない限り、コンビニエンスストアはいたるところに存在する。私がフィールドワークの対象としてきたムラの中にもコンビニエンスストアがあり、よく利用していた。農林業を生業の主体とする人々の集まりとその集団による環境利用を

例とした生活空間の展開、その結果としての景観といった話を持ち込もうとしていた私は多少なりとも戸惑ってしまった。もちろん、ムラそのものの定義や私自身のムラというものに対する認識の問題もある。ましてや兼業化や離農の進む農山村を私自身が目の当たりにしてきており、今の日本では農外就業者がいない農山村のほうがよっぽど少ないこともよくわかっている。しかしながら重要なことは、この学生にとって、コンビニエンスストアも立派なムラを構成する要素であり、事実、そうした生活環境の中で育ってきた農山村の若者が存在するということである。一方で、私が修士論文の作成のために調査に入った佐賀県のムラでは、自家で所有する耕作地の場所をまったく知らない子どもたちも存在した。今、聞き取りをしている縁側から見える風景の中に祖父母や父母が耕し、働く水田があることを知らないというよりも、意識すらしていない子どもたちが存在するのである。

都市と変わらない生活水準あるいは生活様式を手に入れた農山村では、住民の価値観はもちろん、彼ら彼女らの認識するムラのかたちまで確実に変化している。かつて、私は長野県のある山村で、子どもたちの遊びがどのように変化したのか、祖父母、父母、現在の小学生の3世代を対象に調査をしたことがある。私は小学生にどこでどのような遊びをしているのか、ムラの中を案内してもらった。釣りや水遊びをする川、おいしいアケビが採れる山林など、まだまだ自然豊かなムラで生きる子どもたちの様子を垣間見たのだが、その途中で「秘密基地」に連れて行ってもらった時である。そこには間伐や枝打ちの作業中に出た杉枝を使った見事な秘密基地があった。子ども3人は入ることのできる空間である。私は、子どもたちに「ここで、何をして遊ぶの？」と尋ねた。すると、彼らはすかさず秘密基地の中に入り、ポケットから携帯ゲーム機を取り出すと、小さなディスプレイに視線を集中させ、楽しそうにピコピコとボタンを押し始めた。私は正直驚き、しばらく子どもたちの姿を眺めているしかなかった。

しかし、だからといって、私はこういった現象を否定的に捉えているわけではない。むしろ、このよ

うな「現代のムラ」をどのように地理学や民俗学の中に位置づけ、枠組みを形作っていくべきなのか。また、そうした生活環境のもとで育った子どもたちが大学生として教室に現れた時、私は彼ら彼女らにどのようなことを語り、伝えるべきなのか、と考え込んでいる。私が現在所属する大学の講座は、地理学や民俗学、文化人類学、歴史学などについての専攻が設定されているのではなく、衣・食・住という人間生活の基盤と人々が暮らす地域について、食育や環境問題といった現代的な課題と結びつけながら学ぶというコンセプトのもとに成り立っている。したがって、所属する教員も地理学、社会学、考古学、住居学、被服学、栄養学、調理学、家庭経営学など多岐にわたり、学生は、午前中私の地理の授業で地形図とにらめっこをしていたかと思うと、午後にはミシンを操り、その後、まな板に横たわる魚と格闘していたりする。こうした状況の中で、私はムラについて語ることになる。フィールドで見えてきた衣・食・住に関わる様々なものやことを提示しつつ、われわれの生活やこれらが展開される地域について話をするのだが、学生の反応を見ているとはなはだ心もとない気分にもなる。

しかし、私としては、どうしても自身の研究を教育に流し込んでいきたい。そして、ムラを見る、感じるまなざしを次世代の地域と文化を担う学生たちに提示していきたい。そのためには、まだまだフィールドワークが足りない。地域を調べること、記録すること、考えることの大切さと楽しさをCOEで教えられ、そして今、それを教室で語り、伝えることの難しさを感じている。

COE在籍中に巡ったムラ々を思い返しなが

未熟な自分とあわせて、そんなことを考える日々が続いている。

結びにかえて

本稿は、COEプログラムに参加を許された神奈川大学における人文地理学研究者と共同研究に参加された学外の研究者が、本プログラムの遂行上経験した様々な事柄を念頭に、最終的な感慨としてまとめられたものである。したがって、本研究が追求してきた課題への直接的な解答とはいえない。ただ、国際シンポジウムの総括にあたって指摘されたいいくつかの課題についての解答を試みたものではある。例えば中村先生が指摘された（中村政則 2006）写真と図像との違いについては、鄭美愛の小論が地理学的な思考の限界性や可能性を示していると思われる。一方、ふれることのできなかった課題は多い。どのような視座に立つにせよ、残された多様な資料の活用は今後も推進されねばならないであろうし、学内外の要請も大きいと思われる。この点で本COEプログラムは、研究拠点の形成という社会的要請のみならず、本学内外の学徒に学問的な刺激を与えたといえるであろう。しかし、個人的には対象の大きさと研究遂行上、体調を崩したことでその達成感は小さい。

本プログラムで「濫澤写真」の研究の機会を与えていただいた福田アジオ先生、香月洋一郎先生を始め、諸先生、スタッフに衷心よりお礼を申しあげて筆を置くことにする。

（はちくぼ・こうし／ひらい・まこと／
ちよん・みえ／ふじなが・ごう）

【参考文献】

須山 聡

2004 「濫澤フィルムの図像解析とその応用 第2部 濫澤フィルムの現地比定—奄美大島を事例として—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』1：109-125

2005 「韓国におけるコロニアルタウンの景観—同化と異化、保存・利用・破壊」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』3：150-174

中村政則

2006 「第2回国際シンポジウムを「総括」する」『非文字資料研究』14：10-12

八久保厚志

2003 「景色（景観）が変わるということ」『非文字資料研究』2：20-21

2004 「濫澤フィルムの図像解析とその応用 第1部 濫澤コレクションの図像解析とその応用案」『年報 人類文

化研究のための非文字資料の体系化』1：105-108

2005「ブラックカントリーの景観」『非文字資料研究』8：2

2006「景観分析のための郵便資料とその可能性—日本・韓国における非文字資料としての景観切手を中心に—」『人文研究』159：87-101

浜田弘明

2004「『澁澤フィルム』の景観分析とその課題—朝鮮半島多島海を事例として」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』2：74-93

2005「澁澤フィルム撮影地の景観変容」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』3：129-149

2006「『澁澤フィルム』撮影地の景観変貌—韓国・蔚山を事例として」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』3：129-149

浜田弘明・八久保厚志

2005「写真資料と景観変容—澁澤フィルムの分析に向けて」『環境と景観の資料化と体系化にむけて』COEプログラム調査研究資料1：127-159

藤永豪

2004a「写真資料をもとにした景観分析に関する若干の試論—佐賀平野における村落景観を事例に—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』1：202-211

2004b「中山間地域における住民の環境利用と生活空間の変化—写真にみる景観の変遷をとおして—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』2：171-186

2004c「佐賀平野の干拓集落の景観を観察して」『非文字資料研究』3：25

2005a「北京—改革開放が生み出す景観—」『非文字資料研究』7：24

2005b「北京市郊外における農山村景観の変容」『日本地理学会発表要旨集』67：241

2006a「むらの風景が語るもの—世界遺産白川郷を訪ねて—」『非文字資料研究』11：18-19

2006b「北京市都心部および郊外農山村の景観変容」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』3：238-249

2007a「『澁澤写真』の現場を歩いて」『手段としての写真—「澁澤写真」の追跡調査を中心に—』神奈川大学COEプログラム調査研究資料4：42-49

2007b「景観分析における資料としての写真の可能性」『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学COEプログラムシンポジウム報告4：214-219

2007c「景観資料としての写真をめぐって」『「景観」と「環境」についての覚書』43-53

2007d「大学生の環境認識—自然地理学の講義現場から—」『非文字資料研究』18：14-15

藤永豪・八久保厚志・須山聡

2004「澁澤写真に写しとられた景観を読む—昭和初期の奄美大島の事例—」『日本地理学会発表要旨集』65：192